

2月3日 年間第4主日

エシ 1:4-5,17-19 | コリ 12:31~13:13 ルカ 4:21~30

1. エシ

vv.18-19 「わたしは今日、あなたを……ユダの王やその高官たち、その祭司や国の民に立ち向かわせる。彼らはあなたに戦いを挑むが、勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、救い出すと主は言われた。」

この言葉は、預言者エシミヤの時代について要約する、いわばこの預言書全体への序論として、ここに記録されているものです。しかしそれを読む私たちは直ちに、これをイエスの十字架の死に至る公生涯に当てはめて理解するでありましょう。新約の福音を前提にして旧約聖書を読むということは、そういうことだと古くから考えられて来ました。

しかし今日、私たちの教会の主日のミサでこれが朗読されるとき、それは単にエシミヤの時代やイエスの時代という過去を語るだけではなくて、今や再び現在の“神のことば”になるということ、私たちは体験します。それが使徒書および福音書と共に、聖書朗読台から朗読されるからです。

2. ルカ

vv.28-29 「これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。」

ナザレの町は丘の中腹にあって崖など無いことを、福音書の著者ルカは知りませんでした。ですからこの記事が事件の描写ではなくて、ある意図を持って書かれたことは明らかです。それはイエスが十字架に掛けられるに至った裁判の場面を思い浮かべるためでありました。「しかし人々は、“十字架につける、十字架につける”と叫び続けた。」(23:21)

v.21 「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

教会がミサによってキリストの死と復活の記念を行うとき、それは信じる私たちにとって現在の出来事になる(秘跡的に再現される)ということ、大切に考えましょう。信仰とは、ただ一度すでに成し遂げられたキリストの贖いの御業(ヘブ 9:12)を感謝して受け入れることです。それは「代々にわたって隠されていた“秘められた計画”」(コロ 1:26)であって、この神の約束はことごとくキリストにおいて実現しました(II コリ 1:20)。それは私たちキリスト者にとって、常に現在の体験でありますから、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(II コリ 6:2)と賛美することが出来るのです。

この“秘められた計画”は、「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」(コロ 1:27)であって、それによって神は私たちが「光の中にある聖なる者たちの相続分にあずかれるように」(コロ 1:12)してくだ

さったのですから、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」(コロ1:23)と勧められています。

ところがナザレの人々は、「“医者よ、自分自身を治せ”ということわざを引いて」(v.23)、自分たち郷里の人間にとって都合な奇跡をイエスが行ってくれることに期待していましたから、“それは神が決めることだ”と言わんばかりのイエスの返答に憤慨したのだと、ルカは語っているように思われるのです。

教会がミサで記念し、それによって私たちが信じており、救いを受けている“神の秘められた計画”は、しかし、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったこと」(1コリ2:9)でありました。

3. 1コリ

“愛の賛歌”などと呼ばれて、大いにもてはやされて来たこのテキストが、教会の内外を問わず、決して正しく理解されることの稀であったことを、先ず指摘しなければなりません。キリストの贖罪の死と復活は難しくよく分からないが、愛の話ならだれでも理解出来るとして歓迎されて来たのです。そのような人々にとって、およそ vv.10~12 は“何を言っているのか分からない”部分だということになります。

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ロマ5:8) このキリストの愛を受け入れることが信仰であって、その信仰の結果が「神の栄光にあずかる希望を誇りにし」(ロマ5:2)、“死者の復活と来世のいのちを”「忍耐して待ち望む」(ロマ8:25)ことなのです。

ですから、もしこのような“信仰”と“希望”から切り離されると、そこに残るのは“人間の主張、“人間の計画”であって、もはや“聖書の言葉の実現”(ルカ4:21)ではありません。しかし、感謝しましょう。私たちは今朝、“教会を造り上げる”(14:4,12)“愛の賜物”(12:31, 14:1)を受けよう、熱心に努めなさいと勧められているのです。それは「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使20:28)です。

v.13 「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」 アーメン、ハレルヤ。

2月10日 年間第5主日

イザ 6:1～8 Iコリ 15:1～11 ルカ 5:1～11

1. ルカ

w.3-4 「イエスは、…… 腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、……」

神の言葉を聞こうとして押し寄せて来る群衆がおり(v.1)、神の国の福音を告げ知らせる(4:43)イエスがおられるという場面がこのテキストの前半であり、それに続いて漁師の仕事における現実的な課題への取り組みが後半では語られているように見えます。突発的な豊漁も、商品の過剰在庫による資金繰りの困難も、町の一零細企業にとっては死活問題であることを、私たちはよく知っています。「舟は沈みそうになった。」(v.7) しかし、教会はそのような現実的な課題に対して、どんな助けを与えてくれるのだろうか。

この“聖書の学び”は、そのような期待に応えることは出来ません。なぜならその第一の関心事は“神のことば”であって、それに対する人間の唯一の答えは、「主よ、…… わたしは罪深い者なのです」(v.8) だけだからです。しかし、そのように教会で聖書が読まれ、また語られることのいかに少ないことでしょうか。教会であまりにも日常的に使われる“キリストを証しする”“福音を宣べ伝える”という言葉が、ただの空虚な掛け声でしかないことを知りつつ、不真面目に“信者ぶっている”人たちのなんと多いことでしょうか。

イエスの語られる“神の国の福音”を、群衆と共に、また使徒たちと共に、聞き、理解し、受け入れ、信じる者だけが、ペトロと共に“罪を告白し”“罪の赦しを体験して”イエスに従う(v.11)、すなわちキリスト者としての人生の旅を始めることになるのです。

あなたは自分が信じている福音を他人に説明することが出来ますか(Iペト 3:15)? もしかしたら、信じているというのはただの建前に過ぎないのではありませんか? あなたはただの掛け声ではなくて、福音の実質である“罪の赦し、からだの復活、永遠のいのち”を宣べ伝えていますか? もしかしたら、本当は自分では何も信じていないのではありませんか?

2. Iコリ

w.3-4 「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、……」

これが使徒たちの伝承であって、カトリック教会が聖伝と呼んでいるものの起源であることを、私たちは真面目に考えなければなりません。なぜならミサの説教でも、私たち一人一人の信仰理解の中でも、この最も大切であるはずのことがほとんど全く忘れられて来たように見えるからです。

あたかも教会は、社会正義を実現するために、この世の政治的罪、経済活動上の罪、社会の不平等の罪、

国政上の罪等々を声高に糾弾しているように見えます。「罪人を悔い改めさせる」(ルカ5:32)とは、単純に世の中から罪を減らすことのように考えている人が多いのです。理想的には、世の中から罪が無くなって、このv.3の言葉が不要になる世界を夢見ているのでしょうか。もしそうであれば使徒的福音の宣教は無駄であるし(15:14)、さらにキリストの死も無駄であったこととなります。

ミサの開祭の部にある“回心の祈り”には三つの形があります。浜松教会ではこの10年以上第一形式だけが使われて来ました。しかしこれは、第二・第三形式をも参照することによって、より適切に理解出来るものなのです。“怠り”は私たちの罪の動機の一つに過ぎず、人はその存在の根底において「罪に売り渡され」(ロマ7:14)、「死に定められている」(ロマ7:24)のです。「神よ、罪深いわたしたちをあわれみ、いつくしみを示し、救いをお与えください」(第二形式)こそが、ミサだけでなく、そこから流れ出るキリスト者の生活のすべて、また福音宣教の原点であることを理解しなければなりません。

v.11 「とにかく、わたし(使徒パウロ)にしても彼ら(他の使徒たち)にしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。」

3. イザ

v.5 「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

私たちがほんとうに神を仰ぎ見るとしたら、それは「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」というペトロの告白を、自分も共に告白するとき以外ではあり得ません。しかもそれは同時に、神が「あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」(v.7)と宣言されるときなのです。このいずれが欠けた信仰も本物の信仰ではないし、この両面が同時に語られない宣教は本物の福音宣教ではありません。

キリストは御自分の死によって罪に勝利し、死を滅ぼされました。キリストはすべて信じる者に“罪の赦し、からだの復活、永遠のいのち”を与えてくださいます。「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」(Iコリ15:57) 教会の福音宣教は、罪のない平和な世界を実現するという“世直し運動”ではありません。そうではなくて、キリストによる罪の赦しを宣べ伝える“十字架の福音”の宣教です。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(Iコリ1:18) 「神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」(Iコリ1:24)

アーメン、ハレルヤ。

2月17日 四旬節第1主日

申 26:4～10 ロマ 10:8～13 ルカ 4:1～13

1. ロマ

v.8 「“御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。” これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。」

四旬節は、“過越の神秘の祭儀に備えるための” 典礼暦の期節です。それはこの信仰の言葉、すなわちこれを理解し、信じるなら、すべての人が救われる福音を学ぶために、設けられています。教会が今日に至るまで、これを聖伝と聖書を通して確かに受け継いで来ていることを、私たちは感謝したいと思います。

神の子イエス・キリストの十字架の死と復活という歴史上の出来事が、神からの啓示であって、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)であると、使徒たちは宣教しました。この出来事がすべての歴史の時間的中心であるという、原始教会の歴史観を論じて、O.クルマンは“ここでは時間および歴史を度外視して、神についての思辨をなす余地は存在しない”と述べ、有名なパスカルの言葉、“アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、哲学者および知者の神にあらず”を紹介しています(キリストと時 p.8)。

ところで、“心で信じ、口で公に言い表す”(vv.9-10)ということは、盲信するという意味ではありませんから、私たちはこの十字架の福音をよく理解したいと思います。理解するためには、学ばなければなりません。自ら聖書に親しみ、これを真面目に学ぶことによって、ほんとうに“御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある”と言えるようになりましょう。

2. ルカ

vv.1-2 「イエスは…… 荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。」

この悪魔とは、私たち人間にとって他所者ではなく、むしろ身近な存在、「この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊」(エフェ 2:2)であります。この悪魔の支配によって、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」(ロマ 3:23)という“この世”に、キリストは来られました(5:32、1テモ 1:15)。ですから聖書を真面目に読む人は、この悪魔の要求の中に自分自身の姿を発見して驚きます。

私たちは通常、聖書がひたすら語っている“神の子イエス・キリストの十字架の死と復活”という歴史上の出来事を、神からの啓示として受け入れ理解することに疎く、そうではなくて“自分が理解し、納得出来るような”奇跡を見せてくれと、要求します(4:23、マコ 15:32)。「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探します。」(1コリ 1:22) 自分が考えている神や救いと、もし聖書の内容が一致していたら信じようと言うのが、まさに悪魔のそそのかしでありました。なんと的を射た、見事な誘惑でしょう。

使徒パウロはそのような悪魔の誘惑に敢えて抗して、「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えているのです」と叫んでいます(Ⅰコリ1:23-25)。イエス・キリストの受肉と死と復活が啓示であって、それ以外にはしるしは与えられない(Ⅰ1:29、マタ12:39-40)と語られたイエスの言葉を、福音書は伝えています。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」(Ⅰペト2:24)

ですから、福音書の受難物語りは“感動的な悲劇のドキュメンタリー”としてではなくて、神の救いの御業とそれに対抗する私たちの罪の対決があらわにされた“福音の証言”として、読まれなければなりません。その受難物語りの縮図が、この荒れ野の誘惑の伝承であると言うことができます。

3. 申

“ヤーウェに対する最古の信仰告白は、すでに歴史によって規定されている。すなわち、それらはこの神の名称を歴史行為の証言と結びつけている”と、旧約学者 G.フォン・ラートは述べました。人間がどう考えたり解釈したりするか、さらにどのような教訓をそこから導き出すかではなくて、そうではなくて、私たちが「恵みの上に、更に恵みを受けた」(ヨハ1:16)キリストの死と復活の“歴史的事実”に注目することが、どれほど大切であるかを考えましょう。

vv.5-10 「わたしの先祖は、滅びゆくアラム人であり(ましたが)、……(救われて)わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」

四旬節は、過越の神秘の祭儀に備えるための典礼暦の期節ですが、それは決してイベントとしての祭典を企画するという意味ではなくて、十字架の福音をよく学び、よく理解して、“心で信じ、口で公に言い表す”ための大切な成長の時なのです。復活節には、「わたしたちは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」(エフェ2:8)と、皆で心から賛美出来ますように。

アーメン。

2月24日 四旬節第2主日

創 15:5～18 フィリ 3:17～4:1 ルカ 9:28～36

1. ルカ

v.35 「すると、“これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け”という声が雲の中から聞こえた。」

新約聖書全体がそうなのですが、このイエスの変容の物語りも、原始教会が誕生して後に初めて使徒たちが理解した信仰の目で、説明し語られているものです。“イエスがエルサレムで遂げられた最期のこと”(v.31)とは、「キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」(Iコリ 15:3-4)、40日後に天に上げられたこと、50日後に聖霊が降ってキリストの教会が誕生したことを指しています。

弟子たちが最初この出来事を体験したときには、その意味が全く分からなかった(v.33)けれども、“これからイエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期のこと”が、神御自身による救済史の展開であり、救い主イエス・キリストの威光の発現であったことを(Iペト 1:16)、原始教会は後になって理解したのです。

ですから「これに聞け」という天からの声は、今や救い主イエス・キリストの福音を、主の死と復活、昇天と聖霊降臨、そして原始教会の誕生という救済史の出来事を通して理解せよという意味で、受け取られなければなりません。「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(IIコリ 5:18)、「神は御子の肉の体において、その死によってあなた方と和解し」(コロ 1:22)、キリストは「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12)という福音理解が使徒たちによって宣教されて初めて、人々は「あなたがたは、以前には自分の過ちと罪のために死んでいた……、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした」(エフェ 2:1,3)、「あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました」(コロ 1:21)という“罪の事実”を承認するに至ったとすることが出来ます。

そのようなしっかりした福音理解を前提にしないで、聖書を読んだり解説したりしている人は、“自分でも何を言っているのか分からない”(v.33)ところに逆戻りすることになります。

2. フィリ

使徒パウロが「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです」(v.18)と言ったとき、それは教会の外の人々ではなくて、明らかに兄弟と呼ばれる教会の中の人々を指していました。“十字架に敵対する”とは、キリストの死と復活の福音を大切に考えることも理解することもしないで、「この世のことしか考えていない」(v.19)ということでしょう。そのような人は、贖い、罪の赦し、約束された神の国を受け継ぐ希望、死者の復活と来世のいのちを待ち望むという信仰には無関心です。「十字架の言葉(福音)は、滅んでいく者にとっては愚かなもの」(Iコリ 1:18)と書かれているとおりです。クリスチャンであるということが、(使徒たちが伝えた)福音にあずかっている(1:5)という意味で理解されていないとしたら、いつたいどうやって

「主によってしっかりと立つ」(v.1)ことが出来るでしょう。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」(I コリ 15:20) この方が、かの日には、「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(v.21) 「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」(ロマ 8:24)

3. 創

v.6 「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

これを解説して使徒パウロは、「働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます」(ロマ 4:4-5)と述べています。

プロテスタントの人々は“行いよりも信仰が大切なのだ”と主張し、それに対してカトリックの人々“人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるのではない”(ヤコ 2:24)と反論して来たことは、よく知られています。その場合にはどちらも、救われるためには何が信者に必要であるかということ、第一の関心事としているのが分かります。

しかし、何が義であるか、だれが義と認められるかは、主が決められることであって、人にはただそれを受け、感謝のうちに承認する、ということだけが許されているのです。使徒パウロはこれを、「恵みが働くときには」(ロマ 5:16)と表現しています。

主キリストの死と復活によって神が実現された贖いの業は、神の愛に基づく恵みの賜物であって、この恵みの前では私たちの“行い”も“信仰”も、いささかも功績ではあり得ません。聖霊降臨後の使徒たちがそれによって立ち、原始教会が宣べ伝えた福音の希望(コロ 1:23)は、「以前は自分の過ちと罪とのために死んでいた……生まれながら神の怒りを受けるべき者でした」が、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ 2:1,3, 1:7)という信仰の上に成り立っているのです。

四旬節は、すべての信者が“あなたがたが聞いた福音の希望”(コロ 1:23、ヘブ 10:23)、“伝えられたキリストの福音”(I テサ 1:5、II テサ 2:15)を深く学んで、過越の神秘の祭儀に備える期節です。

アーメン。